

病虫害発生予報 第1号(4月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ	並 少	野菜全般	灰色かび病 ミカンキイロアザミウマ	並 並
タマネギ	灰色かび病 白色疫病 べと病	並 やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ	並 並 並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病	やや多 並	カキ	うどんこ病	やや少
キャベツ	コナガ	並	ウメ	かいよう病	並
			果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

1 か月予報(予報期間3月29日～4月28日 大阪管区气象台)

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >

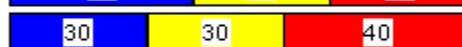
【気温】近畿地方



【降水量】近畿地方



【日照時間】近畿地方



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
4 月	和歌山 14.9	和歌山 100
	潮岬 15.7	潮岬 213

I. 水 稲

1. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 3月中下旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市7.0頭、成虫率61%（平年7.7頭、成虫率29%）、紀の川市1.0頭、成虫率33%（平年8.6頭、成虫率31%）、かつらぎ町7.3頭、成虫率62%（平年2.8頭、成虫率25%）であった。

2. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 3月中下旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市4.5頭、成虫率78%（平年29.1頭、成虫率36%）、紀の川市0.3頭、成虫率0%（平年3.2頭、成虫率15%）、かつらぎ町4.8頭、成虫率63%（平年9.7頭、成虫率45%）であった。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 下位葉に病斑を認めたら早めに薬剤防除を行う。

2. 白色疫病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は11%（平年17%）であった。
② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一のほ場内でも発病に片寄りのみられることがあるので、発生が集中的にみられるところは特に丁寧に薬剤散布を行う。

3. ベと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は3%（平年5%）、新病斑の発生ほ場率は6%（過去7年の平均7%）であった。

- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 前年の発生ほ場では4月上旬から薬剤防除を行う。また現在未発生のほ場でも、周辺からの二次伝染が予想されるところでは予防散布を行う。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は67%（過去7年の平均28%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 雨が多いと多発するので薬剤防除は早めに行う。

② 過湿ほ場では発生が多いので、排水対策に努める。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は8%（平年3%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. コナガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、紀の川市5頭（平年13.1頭）、和歌山市5頭（過去3年の平均6.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同系統の薬剤は連用しない。

<野菜全般>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の施設栽培イチゴでの3月下旬の発生ほ場率は11%（過去2年の平均15%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均1%）であった。

③ 県中部の施設栽培トマトでの3月中旬の発生ほ場率は8%であった。

④ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設内では湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。また、同一系統の薬剤の連用を避け、耐性菌回避を考慮した薬剤のローテーションに努める。

2. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部のイチゴでの3月中旬の発生ほ場率は0%（平年3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに4月上旬頃から密度が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ．果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 春葉初発日 5月16～25日(平年並)
春葉発病量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場(無防除区、有田川町奥)における春葉の越冬病斑の発病率は14.7%(平年19.9%)であった。
- ② 前年10月下旬の春葉の発病園率は16%(平年15%)であった。
- ③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除とともに防風施設の整備に努める。
- ② 発芽前の銅剤散布ができなかった園では、新梢伸長期に散布する。

2. そうか病

- (1) 予報内容 発生時期 平年並
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 前年8月中下旬の果実の発病園率は3%(平年3%)であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発園および前年多発園では、越冬病斑の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場(無防除区、有田川町奥)における3月中旬の寄生葉率は0%(平年0%)で、慣行防除区における寄生葉率も0%(平年0%)であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達が問題となるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月中旬の「富有」の発病葉率は21.9%(平年34.3%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。
- ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
- ③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布することが大切である。

<ウ メ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 3月中旬の県予察ほ場（無防除区、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%（平年0.5%）であった。
 - ② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は32.4%（平年52.4%）であった。前年秋季の気象条件と併せて潜伏越冬病斑量は平年並と考えられる。
 - ③ 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。
 - ② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
- ① 県内47地点の落葉中におけるチャバネアオカメムシの平均越冬成虫数は、落葉50リットル当たり2.1頭（前年0.1頭、平年0.3頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は51.1%（前年6.3%、平年16.0%）であった。
 - ② みなべ町東本庄の予察灯での前年の誘殺数は、チャバネアオカメムシが9月に24,262頭（前年755頭、過去3年の平均2,843頭）、10月に7,293頭（前年0頭、過去3年の平均31頭）、ツヤアオカメムシが9月に11,719頭（前年595頭、過去3年の平均730頭）、10月に25,418頭（前年18頭、過去3年の平均265頭）であった。
 - ③ 県中部、南部では越冬期に防風樹や中晩柑園において、ツヤアオカメムシが多く認められた。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
 - ② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。
 - ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
 - ④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害状況を観察して防除する。
 - ⑤ 和歌山県農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報(<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>)や各地域の農業振興課、JA等の情報を参考にする。
 - ⑥ 農薬登録情報については、農林水産消費安全技術センター(FAMIC)の農薬登録情報システム(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)を参照し、適正に使用する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。